

幸せな動物たちを見てほしい

あつひろ
高市 敦広さん (尾崎)

「ピース」高市敦広さんの呼ぶ声に、檻の奥にいたシロクマがゆくり歩いてきて、大きな顔をしきりに近づけます。高市さんはとべ動物園の飼育員。シロクマ「ピース」を自宅で10日間育てた「お母さん」です。「私は、鳥のヒナをつかまえて育てたり、動物の本にお年玉を全部使ったりするよつな子どもでした。仕事も動物に関わることで以外は考えられなかったです。」飼育員として働き始めて18年。現在は、11頭のクマと5頭のアシカを担当しており、その中の1頭がピースです。

シロクマは、飼育員も入らない冬ごもりの状態を作らないと子どもを育てない神経質な動物のため、ピースの母グマが出産した時、高市さんが自宅に引き取り育てることにしました。それまで国内のシロクマの人工保育記録は100日程度で、ほとんどが1週間ほどで亡くなっていました。前例が少ない中、高市さんは母グマならどうするかを常に考え、ピースを育てました。その間、仕事以外の外出は一度もなく、いつもピースにつきっきりでした。しかし、苦労という感覚はなく、ミルクの飲みが良い、体重が増えた、歩いた、など日々の成長を見ていると飽きることもなかったそうです。初めて動物園に置いて帰った日、高市さんを一



▲生後2か月ごろのピースと高市さん。(2000年2月)
 言葉は通じなくても、目を見ればすぐにピースの気持ちがかかります。

晩中呼び続け、ピースの声は枯れてしまいました。高市さんも帰りの車の中で、10日間が走馬灯のように思い出されたそうです。

そんなピースも今は6歳。体重も300キロになりました。性格はおっとりおだやかですが、てんかんという病気を抱えており、月1回程度の発作が起きます。完治は難しく、薬を使って上手に付き合っていくしかありません。「毎日が無事でいてくれよの繰り返しで、育てる上での確信は今でもありません。シロクマは、30年生きたら長生きと言われませんが、ピースには1日でも長く生きてもらいたいですね。」

高市さんが飼育員として一番に考えているのは、動物の幸せです。「動物園ではよく動物を『展示する』と言いますが、動物は命あるものです。だからまずは、この『展示』という言い方をなくしたい。また、どうしたら動物たちを幸せにしていられるか考え、一頭一頭の性格や好みを理解して行動するのが飼育員の仕事です。幸せそうな動物を見れば、お客さんも喜んでくれるはず。」高市さんはそう信じています。

愛媛県立とべ動物園

■開園時間 9時～17時(入園は16時30分まで)

■休園日 毎週月曜、年末年始(祝日の場合は、その翌日。5月1日(月)は開園しています。)